

なごや 文化 情報

2023

Autumn

No.407

NAGOYA
Cultural
Information

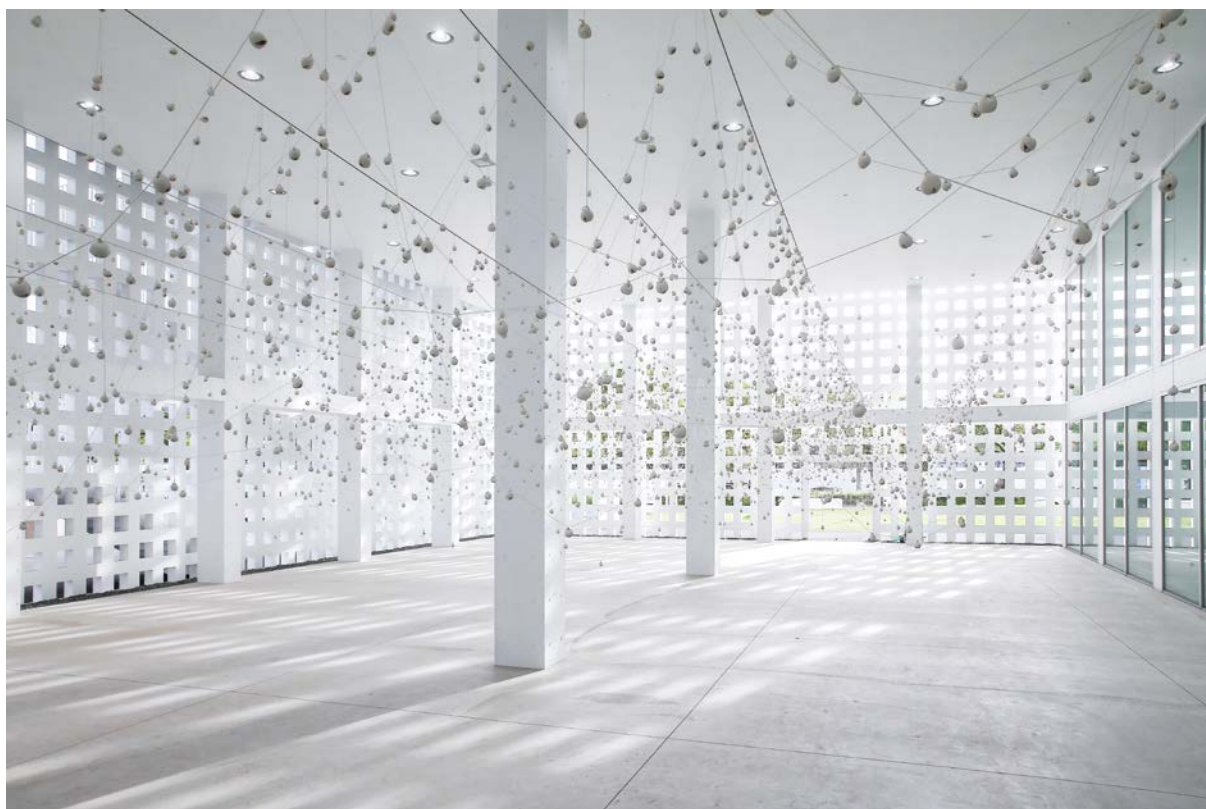
Pick Up Gallery / tane タネ

随想 / 衣裳 木場絵理香さん

この人と... / グラフィックデザイナー・名古屋造形大学学長 伊藤豊嗣さん

視点 / 伝統芸能の未来～名古屋のこれからを牽引する継承者たち～

#zoom up / 作曲家 牛島安希子さん



2023

Autumn

表紙

「土の音」

(2022年/H400cm×W800cm×D2400cm/土鈴、糸)

あたりまえがあたりまえではない。固定概念、ものの見方を変えることの大切さ面白さ。むずかしい説明がなくとも音を奏でることによっていろいろな気づきを得ることができる作品を目指しています。



名古屋造形大学屋外ギャラリー／撮影:漆脇美穂

わたなべ やす ゆき
渡辺泰幸

- 1992年 名古屋造形芸術短期大学専攻科造形芸術専攻修了
- 2003年～ 大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ5回連続出品
- 2015年 愛知ノート 一土・陶・風土・記憶一(愛知県陶磁美術館)
- 2021年 ユニバーサル・ミュージアム ー さわる!“触”の大博覧会 (国立民族学博物館)
- 2023年 令和4年度愛知県芸術文化選奨文化新人賞受賞

ホームページ <https://tutinooto.jimdofree.com>

Contents

Pick Up Gallery tane タネ…………… 2

随想 衣裳 木場絵理香さん…………… 3

この人と… グラフィックデザイナー・名古屋造形大学
学長 伊藤豊嗣さん…………… 4

視点 伝統芸能の未来
～名古屋のこれからの牽引する継承者たち～…… 8

#zoom up 作曲家 牛島安希子さん…………… 10

「なごや文化情報」編集委員

- 杵屋六春 (長唄・唄方 名古屋音楽大学講師)
- 桐山健一 (舞踊・演劇ジャーナリスト)
- 黒田杏子 (ON READING)
- 鈴木敏春 (美術批評・NPO法人愛知アートコレクティブ代表理事)
- 濱津清仁 (指揮者)
- 望月勝美 (編集者・ライター)

Pick Up Gallery



店内1階 商品販売スペース

tane タネ

[アートとクラフトとプロダクトとデザイン]

その狭間を漂う福祉の現場から生まれたモノたちを中心に販売、展示しているボードレスクラフト・アートギャラリー+カフェです。

難解な言葉で鑑をまとった美術ではなく、見晴らしの良い広がりがある表現「アール・ブリュット」の魅力や、商品(製品)と作品を介してお伝えしています。

ギャラリーの展示は、全国各地の福祉事業所、福祉団体の製品をセレクトし、月に一度のペースで入れ替えております。

設立 2014年 オーナー 吉田佳世
住所 〒464-0046
名古屋市千種区山門町1-11
覚王山コーポレーション1F4号
電話 080-4301-7756

ウェブサイト <http://tane.jpn.com>

随想

「衣裳さん」というスタッフ仕事



衣裳

こばえりか
木場絵理香

1984年、劇団きまぐれ入団。87年、金城学院大学短期大学部被服科卒業。89年、名古屋モード学園中退。金城学院大学の卒業生で結成した劇団きまぐれの公演衣裳デザイン・製作をはじめ、名古屋を拠点に多数の演劇、オペラ、ミュージカル等の衣裳デザイン・製作を担う。

今春、京都南座、東京サンシャイン劇場で上演された、松竹製作『歌うシャイロック』（作・演出：鄭義信）という演劇の「衣裳」を担当しました。出演者は岸谷五朗さんや真琴つばささん、小川菜摘さんら錚々たる顔ぶれ、スタッフも東京の第一線で活躍されている方々です。演出の鄭さんとは度々仕事をご一緒させていただきましたが、これほど大規模な公演は初めてでした。演出の意向を基に、キャストもスタッフも一人一人が、お客様が満足する最高の舞台を創り上げるべくベストを尽くし、素晴らしい舞台ができ上がりました。私も衣裳デザインという仕事に集中でき、満足のいく仕事ができたと自負しています。それは衣裳という仕事の中の、縫製、調達をしてくださった松竹の衣裳さん、管理、着付けなどのランニングスタッフの皆さん、履物担当さん、帽子担当さん、ヘアメイクさんと各部の助手の皆さん15名以上のチームの皆さんのお蔭です。本来あるべき分業の中でも、互いに切磋琢磨していることにとっても感動しました。この現場で印象的だったことは、制作・プロデューサーをトップとしたシステム（指示、判断、対応などの経路）が的確で、ストレスを感じることなく仕事が運んだことでした。

16歳の時、東宝初演のミュージカル『ピーターパン』を観て舞台スタッフに憧れ、23歳の時「スタッフで食べられるようになる」という先輩の言葉に誘われて、名古屋市文化振興事業団のミュージカル公演にスタッフとして参加しました。それ以来、なんとかこの道で生きてきた私が名古屋で仕事をする時に思うことは、名古屋の現場には、確実に仕事をこなせる制作、プロデューサーが不足しているということです。もちろん私のプランを優先し、劇団内で分業し、観客の皆様のために努力してくださる劇団もありますが、ほとんどの現場では衣裳担当が、履物、持ち道具、下着の世話まで担わなければなりません。それらをやりたくないということではありません。ただ現在私が置かれているこのような状況下では、後進が続いていかないのではないかと懸念します。

私はこれからもただただお客様にどう見せるかということに集中し、仕事に向き合っていきます。私の舞台スタッフとしてのスキルの半分は、名古屋市文化振興事業団に育てていただいたものです。今後は、本腰を入れて、将来の名古屋の現場を担うプロデューサーを育ててみてはいかがでしょうか？ なんちゃって…。

この人と...



グラフィックデザイナー・名古屋造形大学学長

いとう とよつぐ

伊藤 豊嗣さん

名古屋市内で唯一の美術やデザインの大学である名古屋造形大学（以下「造形大」）の学長として学生の指導にも尽力する、グラフィックデザイナーの伊藤豊嗣さんが、2023年、造形大の母体である学校法人同朋学園理事長に就任しました。

ますますの活躍が期待される伊藤さんに、この地域のデザイン業界の流れや、ご自身の活動についてお伺いしました。

（聞き手：鈴木敏春）

環境と人に恵まれ、デザインの世界へ

ー伊藤さんの幼少期について教えてください。

1958年に三重県桑名市の旧桑名郡多度町に生まれました。実家はもともと専業農家でしたが、父が造園業を兼ねるようになりました。造園業は木を植えるだけでなく、その後の、庭木の剪定や管理などの仕事につながっていくものでした。美術やデザインとは無縁の家庭でしたが、小さい頃から絵を描くことは好きでした。

ーデザインの世界に入ったきっかけはありますか。

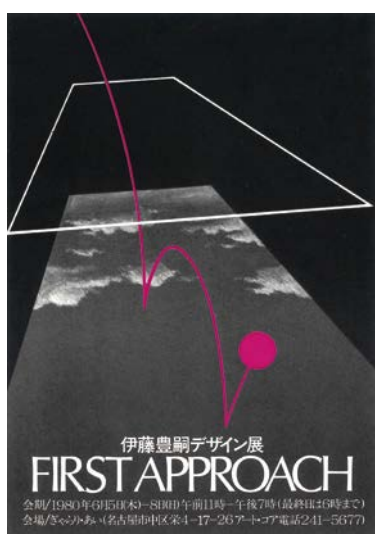
小学校の担任の先生が絵が上手で、校内の池の周りの



幼少期、多度町の自宅で

壁に魚の解説図を描いたり、町内の写生大会で指導したりと、とても絵に対する情熱のある方でした。自由な発想を教えてくれて、とても刺激を受けたのを覚えています。高校の途中から芸術系の道に進もうと思うようになり、四日市市の画塾に通いました。愛知県立芸術大学や武蔵野美術大学などを目指しましたが、画塾の先生から「デザイナーを目指すのもいいが、不安定な仕事だから、教職課程のある地元の三重大学に入って、美術の先生を目指してみてもいい」とアドバイスをいただき、三重大学の教育学部も受験しました。結局、唯一合格した三重大学教育学部美術科へ進学しましたが、結果的にそれが良かったと思います。大学では、絵画の他、陶芸から塑像まで色々なことを経験できました。それが今の制作活動にも役に立っています。

大学に進学したての頃は美術の教師になるのも悪くないかなと考えていましたが、制作していく中で、やはり自分は教えることより、実践してデザインすることが好きだと気がつきました。そんな思いを大学の先生に相談したと



初めての個展「伊藤豊嗣デザイン展 FIRST APPROACH」(1980年)

ころ、「以前に同じようなことを言ってきた卒業生がいたら紹介する」と言われ、8年先輩の高北幸矢先生と出会いました。高北先生は当時、1967年に開校した名古屋造形芸術短期大学（以下「造形短大」）で働きながら、デザイン事務所の仕事をしていました。その出会いをきっかけに先生の仕事の手伝いをするかたわら、道具の使い方や形の創り方などを教えていただきました。また先生の勧めで、1980年には、栄にあった「ぎゃらり・あい」で初の個展を開催しました。イラストの仕事や個展で作品を発表することが後の仕事につながったと思います。

大学での仕事と作家活動

1981年、三重大学を卒業しました。高北先生からは「卒業する時にデザイン事務所を紹介する」と言われていましたが、造形短大のビジュアルデザイン研究室でたまたま実習助手のポストが空くタイミングだったため、その採用面接

を受けました。そこから、助手を務めながら、デザイナーの活動をする二足のわらじを履いた生活が始まりました。大学での助手の仕事は三年の契約でしたが、その後も非常勤教員として働き、1984年には自分の住んでいたアパートでデザイン事務所を設立しました。

1990年に同朋学園が四年制の造形大を設立し、造形短大の教員の多くが造形大に移籍になりました。その結果、造形短大の教員が不足したため、教員募集がかかることになり、応募して専任講師になりました。1985年までは、造形短大も同朋学園の他の大学と一緒に名古屋市東区中村区の稲葉地にありましたが、学生数の増加でキャンパスが手狭になり、小牧市の大草に移転しました。2003年には造形大の短期大学部となり、2008年に廃止になりました。そのタイミングで私も造形大に移りました。こうした経緯を辿りながら、小牧キャンパスでの37年間を経て、2022年に名古屋市北区にキャンパスを移転しました。

名古屋では1989年に世界デザイン博覧会や、工業デザイン（1989年）、インテリアデザイン（1995年）、グラフィックデザイン（2003年）の世界三大デザイン会議が開催され、私も地元のデザイン団体とのイベント企画などで運営に携わり、それぞれ関わりがありました。その結果、各専門分野の人と面識ができ、つながりができました。

今でもそうですが、デザイン業界の中心はやはり東京です。しかし、東京の大学に進学していたら今の自分は無かったと思います。その意味では、名古屋という地域に残り、色々な人に巡り会うことができ幸せだったと思います。

—海外も含めて様々なデザイン展で受賞されていますね。

この地域の先輩方が入賞・入選されているのを見て20歳代半ばから国際ポスターコンクールでアメリカやヨーロッパ、アジアのポスター展に出品するようになり、現在も続けています。海外コンクールのピエンナーレやトリエンナーレでは、それまでの2～3年間に制作した作品を概ね出品するのですが、意外な作品が審査に通ることがあり、どんどん出品していけばよいという気持ちになります。海外のコンクールでは、「どこの馬の骨であろうともモノ（作品）で評価してもらえ」と感じています。

公益社団法人日本グラフィックデザイン協会（JAGDA）が毎年テーマを設定して会員から作品を募集するポスター



JAGDAポスター大賞受賞(1993年)

展があり、1993年に「JAGDA平和と環境のポスター展 1993: "I'm here"」で大賞を受賞しました。受賞したことで、亀倉雄策さん、永井一正さん、福田繁雄さんなど著名なデザイナーに自分の名前と顔を覚えてもらうことができたので、これは自分にとっての大きな転換期でした。JAGDAは全国組織なので、地元だけでなく全国でもつながりができました。

自らの表現を発信

一制作のスタイルについて教えてください。

1999年に愛・地球博のキャンペーンポスターを制作しました。この作品は、空から見下ろした森をイメージして、半立体で作ったものを写真に撮って制作しました。21世紀になって、万博のテーマはかつての産業技術から環境問題に変わりました。そのテーマを意識して制作したものです。

2002年に名古屋市芸術奨励賞を受賞し、国際デザインセンターで記念の個展を開催しました。この時の展覧会ポスターもアナログ制作で木材を組んで撮影し、色や形を補正して制作しています。

グラフィックデザインというのはコミュニケーションです。広告は不特定多数を相手にするとは言え、相手にどれだけつながっているか、見ている個人個人に届いているかが大切だと思います。2022年に大学内のギャラリーで作品を展示した際には、「あなたへ」届いているか、ということ



愛・地球博キャンペーンポスター

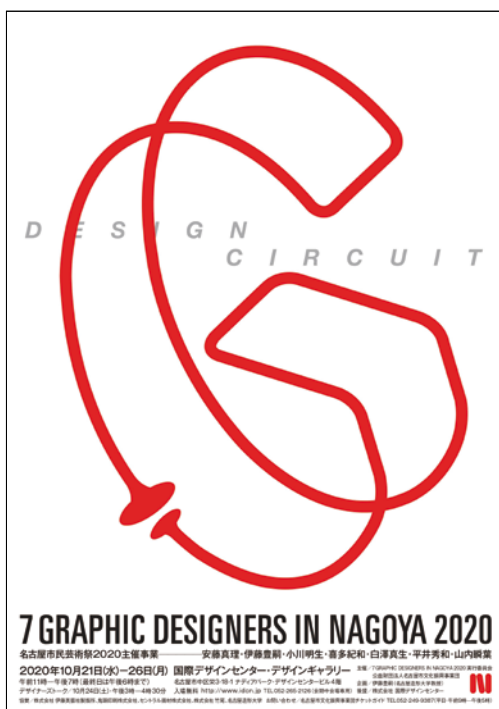
を自分への戒めとして、これをテーマに展覧会の広報を制作しました。

2020年には、名古屋市民芸術祭の一環として、「7 GRAPHIC DESIGNERS IN NAGOYA 2020」という展覧会を企画しました。この展覧会は、名古屋で活躍し



名古屋市芸術奨励賞受賞(2002年)

ているデザイナー7人を選び、「デザイナーキット」というテーマで開催しました。「サーキット」とは「回路」を意味しています。デザインには「発想」と「表現」の要素がありますが、これらは表裏の関係であり、回路のようにスイッチが入って「発想」と「表現」がつながっていくことを表しています。コロナ禍の最中だったこともあり、会場の入り口で、検温や手指の消毒、来場者の連絡先の記



名古屋市民芸術祭企画展ポスター

入といった感染拡大防止対策を徹底しての開催でした。

デザイナーは本来、依頼を受けて制作するものですが、日本では割と早い段階から、福田繁雄さんのようにメッセージ性の強い作品を積極的に制作するデザイナーもいました。私も自主的に展覧会を企画して作品を制作することが多かったですね。自分の表現を見てもらって、そこから仕事につながっていくという流れでした。

造形大学長として、今志すこと

一 今の学生を見ていて感じることはありますか。

教育学部を卒業し、小学校の教員にはならなかったものの、学生を指導する立場になりました。小さな子どもに教えるのとは違い、目標を持った若者に教えるので、難しさもありますが、向き合いやすいとも感じています。

大学の建学の精神として「同朋精神」という言葉があり、違う人同士が共に生きていくことを説いています。この精神を、先代の学長が「共感」という言葉を使い、作品を見て共感してもらう大切さとして表現していましたが、さらに私は「共鳴」という言葉を使っています。美術やデザインの発想や表現は個人から始まり、人の共感を得ることで社会に知られていきます。共感が広がれば、それは共鳴を生み世界にまで及びます。そして、評価となって自らに帰ってくることで、次への活力となります。「個に始まり



名古屋造形大学内での個展DM

個に帰る」、このことを学生へのメッセージとして発信しています。

今の学生を見ると、外向的に自らを発信できる学生も大勢いますが、一方で内向的な性格の学生も多いですね。そうした学生は人と接するのが苦手ですが、創作活動にはコツコツと取り組みます。創作活動は自己の開放にはつながりますが、いずれはクリエイターとして世の中に出ていく必要があります。大学では、自分自身をプレゼンテーションすることも教えています。

一 最近絵の指導員として福祉施設に就職するなど、アートと社会福祉分野を連携させる仕事もありますね。

同じ学園の中に名古屋音楽大学と同朋大学の社会福祉学部があるので、音楽や福祉の分野とアートを連携させた活動を社会に活かしていきたいと思っています。教員同士がお互いの研究内容を知らないことも多いので、事例を紹介する研修会や、教員同士が交流する機会をつくり、共同研究など新たな展開を生み出していきたいですね。

一 それは素晴らしい活動ですし、ぜひ進めていただきたいと思います。

伝統芸能の未来

～名古屋のこれからを牽引する継承者たち～

芸どころと呼ばれる名古屋には、様々な伝統芸能が現在に至るまで継承されてきた。そうした伝統芸能を基軸に、名古屋の魅力を広く発信するイベント「やっとかめ文化祭」が今年で11年目を迎えた。筆者も「まちなか芸披露」はじめ多数のイベントに参加。また近年は、伝統芸能だけでなく、新しい感性によるコラボレーション公演も盛んに開催され、伝統芸能の未来を牽引する若手の皆さんとのご縁に恵まれた。その方々を中心に、当地の伝統芸能がどのように受け継がれているのかをご紹介します。(まとめ：柁屋六春)

やっとかめ文化祭でもおなじみ

狂言界の継承者たち

和泉流野村派の後継者 野村信朗さん

はじめに紹介するのは、和泉流野村派の後継者野村信朗さん。初舞台は3歳。お祖父様（故・十三世野村又三郎さん）、お父様（十四世野村又三郎さん）から、物心つく前から指導を受けてきた信朗さんにお話を伺いました。「私の好き嫌いなど差し挟む余地もなく、当然のこととして稽古を重ねてきました。中学に入り、周囲に目を向けられる年齢になってみると、学校の友人をはじめ、自分の周囲に同世代の能楽師の交流の場がなく、同じ道を志す仲間と接する機会に恵まれませんでした。学校教育の中でも能楽が取り上げられることは



野村信朗さん

少なく、友人達にとって能や狂言が身近なものではないのではと悩んだ時期もありました。高校を卒業し、東京藝術大学（以下、「東京藝大」）に進学して伝統芸能を志す仲間達に出会いました。そして、出身地などに関係なく、熱意をもって努力す

る仲間の姿に希望を見出すことができました。名古屋に戻った今、一番の課題は若手の育成です。自身がまだ若手の身で、そんなことを考えるのは時期尚早とのご指摘をいただきますが、若いからこそ、幼い子ども達と距離が近いという利点を活かして、次世代への橋渡しをしたいと考えています。伝統芸能は厳しい時代を迎えていますが、未来に繋げていけるよう精進します」

和泉流山脇派 狂言共同社の次世代の旗手 井上蒼大さん

幕末、明治維新の混乱期の名古屋狂言界を支え、現在に受け継いできた和泉流山脇派の狂言共同社。設立以来続けている、井上菊次郎家の五代目、二世井上松次郎さんを父に持ち、狂言師として本格的に活動を始めた蒼大さんにお話を伺いました。

「中学生になり、本格的な修業が始まると、それまでは子方として許容されていたことも数段厳しく指導されるようになりました。反抗期も重なり、やる気を失った時もあり、狂言を続けるべきか悩みました。有難いことに舞台上に立ち続けたことで、深く考えずに気持ちを切り替えられたと思います。今後はこれまで演じたことのない演目に挑戦し、技術の向上に取り組みます。父と子ども狂言の普及活動を続けていきたいと思っています」



井上蒼大さん

日本舞踊五條流の気鋭 五條園小美さん

五條園小美さんは幼少期に日本舞踊を習い始めたことがきっかけで芸の道に進んだ新進の舞踊家です。活躍著しい園小美さんにお話を伺いました。

「幼い頃はおとなしい子どもでした。バレエにも興味があったのですが、祖母の勧めで、カルチャーセンターで講師をしていた五條園美先生に入門しました。母に連れられ、歌舞伎を観劇することも多く、日本舞踊に親しみを感じていたので自然に受け入れられました。中学受験時に一度休みましたが、『京

『鹿子娘道成寺』を舞ったことを契機に、本格的に舞踊の道を志しました。金城学院大学に進学し、日本舞踊部を立ち上げ、部長として園美先生の助手を務めました。先生の勤めもあり、卒業後は単独で部を指導しています。多い時は20人を越えた部員も、コロナ禍の影響で今は少し減っていますが、卒業してからも日本舞踊を続けてくれる人もいます。一番嬉しかったのは、親友が名取になり、身近で支えてくれることです。今後は後進の育成に加え、若い世代や海外の方々にもSNSなどで情報を発信するなど、愛好家を増やすべく舞っていきたくと思っています」



©福井和彦
前列左1番目・玉織姫役 五條園小美さん
右1番目・平家の兵役 工藤彩夏さん

家元継承者として流派を盛り立てる 工藤彩夏さん

日本舞踊工藤流家元の家に生まれた宿命として、日々の稽古が必然の生活を彩夏さんはどのように受け止めているのだろう。率直に語っていただいた。

「上手に踊ることができて当然、普段は優しい父（工藤流四世家元工藤倉鍵さん）が稽古になった途端に厳しくなることがとても嫌でした…。厳しさのあまりお花屋さんになりたいと現実逃避したこともありましたが、後継者となった今は、その重責を痛感し精進しています。工藤流が大切にしている立役や三枚目の演目を門弟に伝えるべく毎日稽古に励んでいます。コロナ禍以降、厳しい状況が続いていますが、未来の担い手である子ども達に日本舞踊の楽しさを伝え、入門者を増やすことで裾野を広げていきたいと思っています。また、多くのお客様に日本舞踊の魅力に触れてもらう鑑賞機会を増やしていきたいと考えています」

邦楽演奏家の若手も続々と登場

長唄・杵屋喜多六さんのご令孫で、現在、東京藝大在学中の長唄唄方の杵屋神威さん、同級生で東音山田卓さんのご子息、長唄三味線方の山田皓さんにお話を伺いました。

一長唄を職業にしようとしたきっかけは。

神威さん「長唄が楽しい！これが全てです。祖父や母（杵屋喜鶴さん）に強制されたことはありません。この楽しい長唄を生業にして、素晴らしさを皆さんに伝えたいとプロを目指して勉強中です」

皓さん「従兄が東京藝大の邦楽科に進学したのをきっかけに、同じ舞台上で演奏したいと思い進学しました。大学で同世代から

刺激を受け、プロになる自覚が湧きました」

お二人に未来の展望を伺ったところ、同様に「趣味として始める人たちを増やすのが、最初の一步だと思っています。そのために体験など敷居の低い取り組みで、少しずつでも長唄を愛する人を増やしていくことが願いです」と語っていただきました。



杵屋神威さん、山田皓さん

椋山女学園大学附属小学校の三味線セミナーで 長唄を始めた皆さん

椋山女学園大学附属小学校ではアフタースクールで長唄の講座があり、令和5年の最年少は小学2年生。その後、大学生や社会人になっても継続している参加者も多くいます。そこで、参加者の皆さんと、指導にあたる杵屋三太郎さんにお話を伺いました。

現在、大学生の吉川乃愛さんは「やっとかめ文化祭や、地域のお祭りなど身近なイベントで長唄三味線の魅力を知って身近に感じてもらえたら嬉しいです」と話してくれました。三太郎さんは「礼儀などの基本は大切にしつつ、生徒たちが今日も楽しかったと笑顔で終わられる楽しい稽古を心掛けています。敷居が高いイメージの伝統芸能ですが、学校教育に取り入れてもらい、子ども達が触れるきっかけをつくることができれば、魅力に気づく人は必ず出てきます。それが、伝統芸能の未来の担い手を増やす糸口になるはずですよ」と語っていただきました。



杵屋三太郎さんと生徒の皆さん

まとめにかえて

伝統芸能の道に進むきっかけは、家業であったり、習い事や学校教育であったりと人それぞれ。筆者も名古屋音楽大学の学生で結成した「めいおん長唄三味線ガールズ」を指導していますが、そうした学生の中から、次代を担う演奏家が登場することを期待しています。今回は、やる気に満ち溢れ、将来を見据えて積極的に活動する継承者の皆さんに接して、「芸どころ名古屋」の明るい未来を確信することができました。

#zoom up

ズーム・アップ

作曲家

うし じま あ き こ
牛島安希子さん

愛知県大府市出身の牛島さん。現代音楽作曲家として愛知県を拠点に国内のみならず、欧米各地の音楽祭に参加するなど精力的な活動をされています。令和4年度愛知県芸術文化選奨文化新人賞を受賞し、将来を嘱望されている牛島さんにお話を伺いました。（聞き手：濱津清仁）

幼少時よりピアノ・作曲に親しむ

—どのようなきっかけで作曲を始めたのですか。

記憶にないぐらい幼少の頃からピアノが好きだったようです。あまりにも楽しそうに弾いていたので両親がピアノを習わせようと、5歳から地元の音楽教室に通い始め、そこで同時に作曲を学びました。それが作曲との出会いです。J.S.バッハの作品などをピアノで弾くのも好きでしたが、もともとある曲を再現するより、自分の可能性を幅広く表現できる作曲に次第に夢中になっていきましたね。本を読んだり、空を見て想像を膨らませたりしては、その感覚を音にしていました。



親戚の家にてピアノに親しむ牛島さん（3歳）

子どもの頃は音楽を職業にすることは意識していませんでした。ところが、音楽教室で師事していた作曲家の小井洋明先生から、中学卒業時に「君は作曲の才能があるから、これから高校3年間で勉強して愛知県立芸術大学に入りなさい。ストラヴィンスキーの『春の祭典』を聴いて、これを良いと思ったら作曲に向いている」と言われました。正直なところ中学生の時に『春の祭典』を理解できていたかわかりませんが、音楽が好きでしたし、“音楽を突き詰めることで

自分に何か変化が起きるのでは”という予感がして、挑戦しよう決めました。そこから受験勉強に励み、現役で合格することができました。

方向性を試行錯誤する大学生生活

大学に進学してからのの方が大変なことも多かったです。自分が現代音楽に取り込む意味を考えながら創作をしていました。卒業後、進学した同大学院では外部の先生方による集中講義があり、とても刺激を受けました。ノイズ・ミュージックなどの先鋭的な音楽との出会いに、“こんなことをやってもよいんだ”という解放感を感じたのを覚えています。

—どのような経緯でオランダ・ハーグへ留学したのでしょうか。

大学時代に師事していた寺井尚行先生に留学を勧めていただいたこともあり、大学院修了後、学びを深めるためにオランダに留学しました。オランダは一般的には古楽というイメージがあると思いますが、電子音楽も非常に盛んです。また、オランダ第3の都市ハーグのハーグ王立音楽院では作曲家ルイ・アンドリーセンの影響で実験音楽に取り組む学生も多く、面白いことができそうだと思いますし進学を決めました。



留学先のオランダにて

牛島さんの音楽が世界へ羽ばたく

—作曲スタイルはどのようにして確立されたのですか。

オランダでの様々な出会いにより、自分の音楽を一から問い直すことになりました。留学して2年目に作曲した『Distorted Melody』（2010）は、それまでの自分の音楽人生を丸ごとぶつけたような作品になりました。この作品がハーグでBang on A Can アンサンブル（ニューヨークを拠点としているアンサンブルグループ）により初演、2012年にはアメリカで再演され、自分の可能性が大きく広がるきっかけになりました。その後もベルギーでのアルスムジカ現代音楽祭や、日本でも東京芸術劇場主催のボンクリフェスティバルにて、音楽家の佐藤紀雄さんが率いるアンサンブル・ノマドにより再演されました。

2014年はリコーダー奏者のスザンナ・ボッシュより委嘱された作品『Instan' stillation』（コントラバスリコーダーとエレクトロニクスのための）の制作に力を入れました。コントラバスリコーダーは音色が多彩で魅力的な楽器ですし、スザンナは新しい奏法の開発にとっても協力的で、そのやり取り

の中で曲ができていくのが楽しかったです。この作品がきっかけで、楽器と電子音を組み合わせる作曲することが増えていきました。この作品も欧州各地で演奏していただきました。



『Instan' stillation』演奏の様子（2014年）

作曲家としてはベートーヴェンなどの名曲よりもさらに良い作品を創らなければいけないというプレッシャーがあります。常に新しい技術を学びながら、自分なりの表現を獲得できない日々模索しています。これまで先人が培ってきた作曲の技術に、自分が幼少時からピアノを通して親しんできた音楽を取り込んだ上で、今の時代だからこそ創る意味があるものを創りたいです。そして、何より自分が面白いと思う音楽を創り続けていきたいですね。

帰国後、地元の愛知でコンサートの企画に携わる

2014年にオランダから帰国し、2016年には、あいちトリエンナーレ実行委員会が企画するトークイベントシリーズALASCOPE03「現代の音楽をめぐる」にて講師を務めました。愛知で再び活動するにあたり、現代音楽の面白さを伝える工夫をしようと意欲的に取り組みました。2017年のアッセンブリッジ・ナゴヤ「みなとまちコンテンポラリー・ミュージック



ALASCOPE03「現代の音楽をめぐる」講座の様子（2016年）

ックコンサート“みなとの永い夜”では、現代音楽のコンサートを創り上げようと、名古屋市港区を取材して制作した、室内楽と映像のための『海と記憶と時間』を初演しました。映像は映像作家の丸山達也さんをお願いしました。どちら

も企画の段階から携わったものです。

2020年に始まったコロナ禍では、愛知県在住の演出家で映像作家の伏木啓さんに映像をお願いし、チェロとピアノ、エレクトロニクス、映像のための『La mémoire inconsciente』を制作・収録し、オンライン公演で発表しました。映像表現には可能性を感じますね。

2022年3月にニューヨークでのミュージック・フロム・ジャパン音楽祭、4月にはロンドンのサウスバンクセンターにてそれぞれ委嘱作品が初演されました。今年の秋にも東京、スペインで作品が発表される予定です。作品は楽器編成や発表される場によって方向性が大きく変わりますが、“生命力のある音楽”という軸は意識しています。



ミュージック・フロム・ジャパン音楽祭
リハーサルの様子（2022年）

—最後に読者の皆さんへのメッセージをお願いします。

作曲をすることで社会に関わっていきたいですし、後進を育てることや研究にも力を入れていきたいと思っています。コンサートを聴きにきてくださる方々には、“メディアにのらない、面白い作品がたくさんあることを伝えたい”という気持ちがあります。挑戦し続ける音楽文化に、少しでもアンテナを広げていただけたらと思っています。



愛知県芸術文化選奨授賞式

—コロナ禍を乗り越えて世界で活躍中の牛島さん。これからも目が離せません。

なごや文化は寄附でもつ



名古屋市文化基金

支援・育成事業

— 市民やアーティストによる文化芸術活動を支援・育成 —



参加・体験事業

— 市民だれもが参加できるワークショップ・公演等を実施 —



鑑賞事業

— 優れた舞台芸術を鑑賞する機会を提供 —



市民文化の情報発信

— 情報誌の刊行などを通して、様々な文化情報を発信 —



皆さまからいただいた寄附金を活用し、なごや文化創造のための様々な事業を展開しています！

名古屋市文化基金の詳細および
寄附のお申込みはこちら



ご寄附に関する
お問い合わせ

名古屋市観光文化交流局
文化芸術推進課
TEL 052-972-3172

公益財団法人
名古屋市文化振興事業団
TEL 052-249-9390

頼もしい味方をお探しですか？



集客・販促プランナー



アートディレクター



印刷コンサルタント

駒田印刷株式会社 TEL(052)331-8881

〒460-0021 名古屋市中区平和2-9-12 http://www.kp-c.co.jp

WE MAKE YOU MOVE
感動をあなたへ

20Hz ← → 20kHz



PRO AUDIO & VISUAL & NETWORK
舞台音響／映像設備
設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売

この領域を超えて最高のパフォーマンスを。

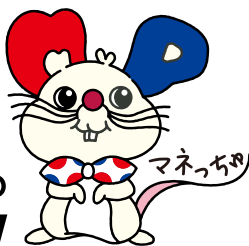
お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する
株式会社 エーアンドブイ
〒464-0846 愛知県名古屋千種区城木町二丁目98
TEL/052-761-5400 FAX/052-761-0909

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命ください。美術展の受付も対応いたします。

業務内容

- ①舞台の企画・制作マネジメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営

MANAGEMENT PRO
株式会社 マネージメント・プロ



〒461-0004 名古屋市中区東区葵2-11-22 アバンテージュ葵ビル301
TEL:(052)508-5095 FAX:(052)508-5097 Web:www.mane-pro.com

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

- ◎年間6,600円で毎月お手元にお届けいたします。
- ◎毎月24,000部発行
- ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、ホール、DM等にて配布

E-mail:mane-pro@mane-pro.com